

市川自然博物館

12月号

（通巻第2号）

だより



～オシドリ～

11月初めのある朝、自然博物館の裏にある観察園の池に、一羽の雌のオシドリがやって来ました。いつもは、オレンジの鮮やかな色彩と銀杏羽が美しい雄のひきたて役となる雌ですが、この日は雄が来なかったので、グレーを基調とした雌の上品な色合いと班紋の取り合わせの妙を初めて知ることになりました。

オシドリは、谷あいの溪流や沼で繁殖し、冬になると越冬のために街の近くまでやって来ます。木の枝に止まるのが得意で、巢も、樹のほらにつくります。冬越しするときは、カルガモやマガモなどといっしょに淡水の池や沼ですごします。

観察しよう!

『発見メモ』をつけよう。

自然観察の楽しさを更に増すために、観察によって発見したことから『発見メモ』として記録しましょう。

『発見メモ』といっても難しいことを記録するわけではありません。記録用の手帳を一冊用意して、いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どうやっていたかを書き留めておけばいいわけです。「誰が」といっても、植物や動物の名前がわからないと記録ができないとあきらめることはありません。よく観察して、姿・形や色などの特徴を簡単な絵に書いたり、声や臭い、触った時の感じなどを詳しく記録しておけば、後で人に教わったり、図鑑で調べて名前を知ることができます。自分流の『発見メモ』を工夫して、観察のたびに記録を残せば、また新たな発見が必ずあるはずです。

自然博物館は観察のヒントがいっぱい。

自然博物館では『市川の自然』をテーマに、林や海辺、市街地などの身近なところで生きる生物を紹介し、展示しています。これらの話題は、季節や場所にに応じて注意して目を向ければ、誰でも簡単に観察できるものばかりです。展示室では、学芸員が質問を受けたり、解説をしたりしますので、観察のポイント等わからないことは気軽に声をおかけ下さい。



『親子自然探検隊』

各地で開かれている自然観察会に参加することも楽しいことです。

自然博物館では、3年ほど前から、市川市立行徳公民館とともに親子を対象にした自然観察会を行ってきました。今年は、『親子自然探検隊』と名付けて毎月1回、市川市内の各地を楽しく観察してきました。市内での観察のヒントとしてその内容を簡単に紹介しましょう。

月	場 所	テ ー マ
4月	行徳駅前公園	春の公園
5月	大町自然観察園	湿地の生き物
6月	江戸川放水路	潮干狩
7月	行徳公民館	雨天のため講義
8月	大町自然観察園	ホタルの観察
9月	行徳野鳥観察舎	水鳥をみよう
10月	柏井雑木林	ドングリと落ち葉を拾おう
11月	自然博物館	博物館をみよう

市川・自然探検

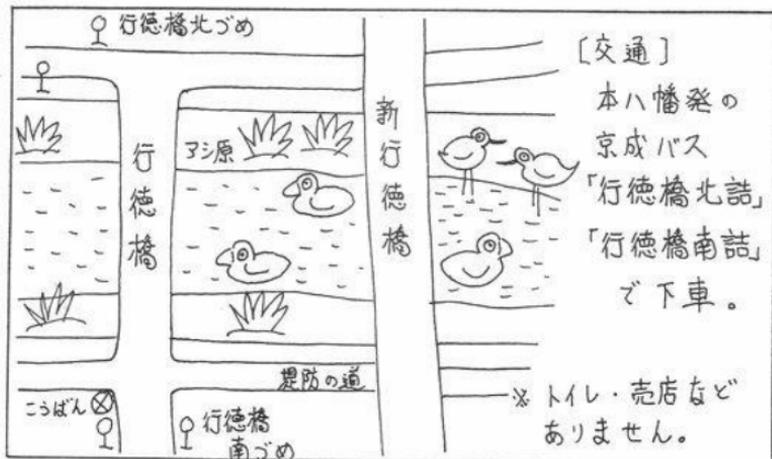
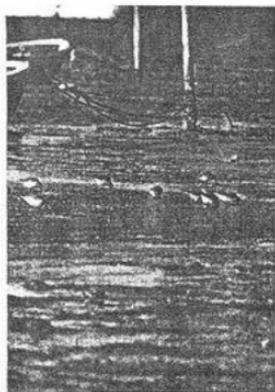
～江戸川放水路で鳥を見る～

木々が葉をおとし、虫たちが春のおとずれをじっと待つ冬に、江戸川放水路はにぎやかな季節をむかえます。江戸川放水路は、行徳野鳥観察舎、谷津干潟とならぶ野鳥観察の好適地で、北から渡ってきた多くのカモやシギたちが、ひと冬をここですごします。

<観察のポイント>

- ①堤防の上……鳥との距離は離れていますが、いろいろな種類を見るにはいい場所です。
- ②アソ原や……暖かい日には、河川敷において物かげ船のかげに身をひそめ、鳥たちが入れ替わりやって来るのを待つのも楽しいです。熱いお茶とひざ掛け、折りたたみイスをもって！
- ③新行徳橋……飛んでいる鳥を、さらにその上から見るのことができます。車にご注意を。

※放水路の鳥の映画を自然博物館展示室で上映しています。



市川のこん虫 トンボ



市川市内で今まで記録されたトンボは58種です。このうち、街中でもよく見られるのは、「アジアイトトンボ・シオカラトンボ・ナツアカネ・アキアカネ・ウスバキトンボ」の5種です。また、市指定天然記念物である「ヒヌマイトトンボ」は江戸川河川敷の行徳橋付

近で、「ヒメアカネ」は大町自然観察園でしかその姿を見ることはできません。トンボは普通、初夏～晩秋にかけて活動し、幼虫で冬越しをしますが「オオアイトトンボ・ホソミオツネトンボ」の2種は成虫のまま越冬し、翌春再び活動します。トンボはサナギの時期がなく、卵→幼虫→成虫と変態し（不完全変態）、成虫・幼虫とも生きた昆虫などをエサとして生活しています。幼虫はヤゴと呼ばれ、水中で生活しておりヤンマのヤゴは、メダカなどの小魚やオタマジャクシを食べています。



オス



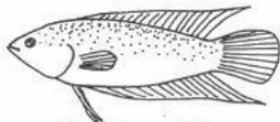
メス

体を横から見て、オスのおなかの先端にある突起の方が、メスの突起物にくらべてまん中の部分がふくらんでおり、メスの方が全体的に細いです。

(オスとメスのちがいを)

むかしの市川 ～その1～

釣の魚 チョウセンブナ



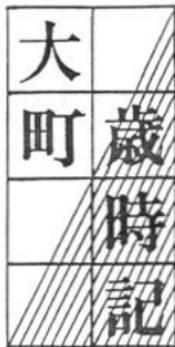
〈チョウセンブナ〉

私が子供の頃、チョウセンブナという小魚がたくさんいました。大きさは5cm内外で、尾びれの縁が丸く、体色は黒褐色をしていたように記憶しています。江戸川の河原にあった池や、真間川から分かれる用水路などに特に多くいたように思います。水路の縁や、池の水草の間な

どを網ですくうと、よくとれたものです。この魚をフナといっしょに飼うと、大きなフナが小さいチョウセンブナに攻撃されて死んでしまうのには驚かされました。

ところが不思議なことに、この魚は昭和10年代を境に、忽然と消えてしまったのです。今改めて調べてみると、トウギョ科に属し、原産地は朝鮮半島西部から中国、1914年頃に移来し、関東平野を中心に大繁殖し、関東大震災の後に急に増えたので、地震鮒と呼ばれたとのことでした。

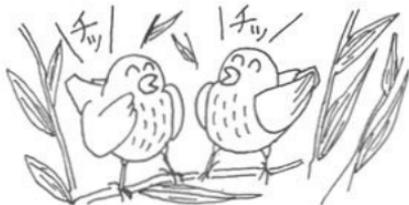
(博物館指導員 大野景徳 記)



冬になると、大町公園にはたくさんの冬鳥たちがやって来ます。「チッ、チッ」と鳴きながら、枯れたアシ原の中にひそんでいる、アオジやカシラダカもそのなかまです。アオジは、胸が黄緑色をしたスズメくらいの鳥です。夏には涼しい山や北の地方で暮らしています。一方カシラダカは、その名の通り、頭が頭巾をかぶったようにとんがって見えます。遠くシベリア地方から渡ってきます。アシ原の中にはそのほかにもいろいろな鳥がいます。皆さんおなじみのスズメや、春から秋にはとてもうつくしい声でさえぎっていたホオジロもいます。ホオジ

ロは、冬には「チチチッ、チチチッ」という地鳴き（じなき）をする、ほったの白い茶色い鳥です。

アシ原はそんな鳥たちの社交場になっているようです。みなさんも、ちょっとのぞいてみてはいかがですか。



行徳野鳥観察舎



スズガモ

文と絵 蓮尾 純子

だより

「うわあ、あれ、みんな鳥なの！」

観察室から見渡すと、水面がこの鴨の群れにおおわれていることがある。その数、1〜数万羽。よそでは見られないほどの大群だ。

泥深い内湾を好み、潜水して泥中の小さな貝や有機物を泥ごと食べる。リリリリという羽音の「鈴鴨」と言うより、たくさんいるから「数々鴨」なのかも知れない。

東京湾奥の浅瀬の餌場から保護区に入るには、JR京葉線、湾岸道路、更に高さ50mもの高圧線を越えなくてはならない。安全な高度をとるため何度もUターンをくり返す大群の飛行は圧巻だが、鴨たちの苦勞もひとしお。冬の観察舎の名物だった何万羽もの大群を見るのは、年々むずかしくなっている。

スズガモ

メス



オス

ご存じですか？

★市川の自然のガイドブック「市川の自然」ができました！

A4版 56頁 1部 500円 (税別)

自然博物館では、博物館の展示を皆様により一層楽しんでいただき、また、身近な自然に親しむためのガイドブックとしてもお使いいただけるような「市川の自然」を販売しています。内容は、より多くの方々にご覧いただけるように、わかりやすく、たくさんの写真をつけています。

★市川の植物を知るには 「特別展資料 市川の植物」をどうぞ！

A4版 22頁 1部 500円 (税別)

開館記念に行った特別展「市川の植物」の参考資料として、1989年までに市川市内で記録された約 950種の植物を目録にまとめました。植物に興味のある方、これから植物について勉強してみよう！というお方には是非おすすめします。

★絵はがきで年賀状を送ろう！

定価 1枚50円 1組 250円 (税別)

市川で見られる、トビハゼ・アシハラガニ・ツバメ・オオケタデ・クサボケの5種類の動植物が、素敵な絵はがきになりました。今年のお正月は、ちょっと趣向をこらして、絵はがき年賀状というのはいかがでしょう。



※本及び絵はがきは自然博物館受付にて販売しております。

